

どうしても守りたい！地域に唯一の医療機関

本吉病院 医療支援報告
山田裕医師 (坂総合病院)

震災で大きな被害を受けた気仙沼市本吉地区にある唯一の医療機関、同市立本吉病院に、民医連医師が7月の1ヶ月間交代で支援に入っている。

本吉病院は、同地区約1万千人が住む町で唯一の医療機関だが、震災では1階天井近くまで浸水した。入院患者などは2階に避難し無事だったが、震災直後、電気・ガス・水道が止まったなか患者さんは次々と訪れた。

入院患者を転院させた後、院長を含む2名の常勤医師は病院を去り、支援の医師だけで、本吉病院で地域の医療を守ってきた。

この度、本吉病院に6月30日から7月3日まで、坂総合病院副院長の山田裕医師と研修医の千葉茂樹医師が医療支援に入りました。山田医師の支援報告が届いたので、一部紹介致します。



◆地域の状況◆

本吉の町に入るとそれまでの農村風景が一変、がれきの山がいくつかの所に見える。おそらく、田圃だったと思われるところに雑草が一面に生えている。海岸線はすべて破壊されている。復興は、がれき撤去、道路修理という段階か。

◆本吉病院◆

外観は津波をかぶった建物とは思えないほどきれいになっている。ただし、周辺の民家は破損して住めない状況のまま。病院内は至る所に津波の破壊力を示す跡が残る。被災後、地域住民が率先して清掃してくれたとのこと。一階で外来診察、処置室、点滴室、検査室、レントゲン室等々。電気、水道は完全復帰。

◆医師体制◆

被災直後に徳州会から支援が入る(5月はじめまで)、その後「国診協・全自病」で医師支援。今回7月から医師会からのJMATとしての支援、支援要請は内科医師2名。有住俊広先生(呼吸器科)が2ヶ月間支援に入る。もう一名枠を民医連で担当。今後赴任してくれる医師について1名目処がついたとの報告あり(気仙沼副市長から)

◆診療体制◆

週日中での診療が中心 2~4診体制 夜間、土曜午後、休日は休診 急患は対応。外来は午前集中し、午後は比較的少数。慢性疾患が多く、診察と定期処方が中心、支援医師が内科以外にも対応したこともあって、小児科なども受診が増えているとのこと。全例看護師が問診を取り振り分け、診察室内にも看護師がつく。以前のカルテは失われているので、支援医師の記録が糊付けされている。処方箋は、「災害時処方箋」で、紙カルテと処方箋にカーボン紙を用いてコピーしながら記入。

調剤薬局は地区内に数件開業。患者数に偏りがあり、月の上旬・中旬は60~70人/日、下旬に多く150人/日程度。

◆感想◆

震災復興支援であることは違いないが、内容的には医師不足地域への診療支援。医師支援の必要性はあるが、「内科」というよりは「一般診療」とした方が妥当か。*初期研修医でも、指導医がいれば十分可能。今回、初期研修医の千葉先生は当直一人立ち前だが十分対応できた。*一人が長期支援なので、短期支援の繰り返しが可能と思われる。*処方箋記入が若干戸惑うが、すぐに慣れる。支援なので現地の新たな負担になる提案は避けたが、今後この方面への予防的な働きかけを重視する必要がある。看護師さんから地域でのハエや蚊の大量発生が報告されており、公衆衛生的取り組みに病院も関与しながらすすめる必要がある。いずれにしても、病院が市立病院として存続が決まったということで看護師さんたちの表情も明るく、また常勤医のめども半分立ったということで、現地での病院のあり方について本格的に再建に向けた検討が開始されると思われるが、医師の診療支援の必要性はしばらく続くものと思われる。

7月8日~11日まで支援にはいつている立川相互病院院長草島健二医師。「本吉地区唯一の病院として、地域医療を守るために、医療支援はどうしても必要」と話されていました。(7月9日、本吉病院で)

病院に腹痛の子どもさんを連れてきた粕谷さん(40代、女性)。「歌津町で家が全て流され、避難所暮らし。避難所を出なければならぬ2年後の生活、住宅の目処は全く立たない。海の近くなので同じ場所にも住めない。本吉に病院がないと気仙沼まで行かなければならぬので大変助かります」



レンタカー

